



花
笑
み

新潮
社

花 笑 み



Printed in Japan
© Y. HAGIWARA

昭和四十二年六月二十五日印刷
昭和四十二年六月三十日発行

定価 四四〇円

著 者 萩 原 葉 子

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一電話
東京(總)一一一 振替東京八〇八

印刷 塚田印刷株式会社

製本 神田加藤製本所

(落丁本はお取替えいたします)

目次

女客

五

花笑み

四三

貸室

一〇五

手術前後

一八九

装
画
堀
川
公
子

花
笑
み

女

客

札幌駅から二人を運ぶタクシーは、北十条の母の家へ向って、走っていた。

二十五年ぶりに駅頭で母に再会した私は、強い衝撃のため、言葉はほとんど交わさなかった。東京からの永い旅の疲れと、母に会えた緊張とで、私の感情はかえって平板な感激のないものだった。窓際に坐った私の腕や背に、冷たい隙間風が伝わって来て、思わず服の衿をかき合せていた。北海道の六月の肌寒さにも戸惑いを覚え、足元の靴の白さが侘しかった。

霧がおりているのか、両側に明滅しているネオンはぼんやり点り、夜の街は人の影もまばらである。

母の横顔は皺でよごれていた。二十五年間の私の知らない空白な歳月を、皺の中に宿しているかのように思われた。

——札幌駅の混み合っている人々の群の中から、母の顔を捜し出した時には、想像もしていなかった母の老いが悲しかった。劇的な華々しい感激の一瞬を夢見ていた私は、だまされたよ

うでもあった。

「葉子じゃない？ あたしより背が高いのね」「お腹空いていないの？」母はこわ張った表情で最初のことを投げたが、それきりで言葉は跡切れ、自動車に乗り込んだのだった。

区割されている広い街を、真っすぐに走り続けていたタクシーは、左の小路に曲ると、やがて大きな門の前で止った。

母は夢から醒めたように、ゆっくり身体を起すと「ここがあたしの家なのよ」といった。見ると、門燈の奥に高い塀をめぐらせた、大きな家の屋根が見えている。

母の後から蹤いて、門に入ると突然、犬が激しく吠えはじめた。二匹のようだった。母はやさしい声で犬になにか話していたが、叱ってくれる様子はなかった。

ストーブの燃えている茶の間に通されると、中年の大きな男性が一人で読書していた。母の家には誰がいるのか、私はまだ分らない。

母を捜し出せるきっかけとなったのは前橋の父の戸籍からだったが、それには「米山武一、妻いね」となっているだけで、母が米山という人と結婚していることは分っても、職業や家族のことはいっさい分らなかったのだ。

茶の間はよく整理されていて、チリひとつなかった。昔の父や私達と一緒にいた頃の乱雑だった家庭を思うと、不思議な気がするのだった。私は戸惑って坐っていた。

「あたしの夫米山よ。ご挨拶しなさい」と、母はいった。米山は本を伏せると、愛想よく挨拶を返してくれた。母には不釣り合いの若い夫だった。

「そんなおじぎじゃ、世の中は通れないよ。あたしがついていなかったからむりもないけれどねえ」イライラした顔で言い、私のやり直しを不満そうに見ている。駅で最初に会った時の、こわ張った表情はまだ消えていなかった。電燈の光で初めて見る老いた母の顔だった。

「あなたという人はお行儀もよくないし、顔も萩原そっくりだし、がっかりしたわ」

突き放すように言われて、張りつめていた感情が、危うく破れそうになった。が、涙を見せまいと我慢していた。

「でも良かったわ、赤ん坊なんか背負って、ねんねこなんかで、いまさら頼って来られたんじや、たまらないものね」

「……………」

「駅であんたを見つけた時は、ほっとしたのよ。ほんとに昨夜も遅くまで二人でそのことばかり話し、心配で寝られなかったわ。おかげで頭痛がして仕方ないわよ」薄くなった髪に指先を突っ込みながら母は言った。

「すみません、めいわくをかけたりにして、わるかったと思いますわ」

「大めいわくよ。だいいちこっちの都合も考えずに突然来たいなんて、手紙くれるんだもの。」

驚くじゃないの？ もっと世の中のこと知らなくては、世間は歩けないよ。夫はいるんでしょうね？ 苗字も違うし……」

畳みかけられるように言われて、返事ができなかった。胸がまたつまった。それに別れなければならぬ夫のことは、母に知らせたくなかった。私は黙って頷いた。

「それじゃ、生活は大丈夫なのね、それを聞いて安心したわ。幾日暇をもらって来たの？」
夫に五日間の許可をもらって来たのだが、

「明日は帰ります……」と答えていた。

「明日？ なにいうの！」母はあきれて聞き返した。

「いま来たばかりで帰るってことないわよ。ねえあなた！」

米山はさつきから抜げていたページを伏せて、大きな身体を重そうに坐り直した。

「札幌祭りを見ていらっしやい」

かざり気もなく言った祭りという言葉に、ふと救われるものを私は覚えた。

「わたしは、いつかはこういう日が来ると思っていました」米山はしんみりした口調で言う。

「まあ！ あなたはそんなことを考えていたんですか？」

入口の襖が静かに開いて、少女がお茶を持って入って来た。

男の子のように刈り上げた髪は、若い日の母と同じ髪型だった。少女は雪子といってこの家

で永く働いていると母は言った。そして雪子には私を親戚の者だと紹介した。

若い雪子と並ぶと母の年寄りらしさが目立った。それを夫の前で隠そうともしないのが、不思議だった。

雪子は三人の前に茶碗を置くと、礼儀正しい仕種^{しぐさ}で襖を明けて出て行った。

2

長い廊下を母に教わったように歩くと、突き当りに浴室があった。脱衣場で衣服を脱ぐと浴槽に私は深く身を沈めた。窓からの冷たい空気が湯気と交流して白い気流のようだった。

とうとう北海道まで母を尋ねて来た、という思いは、もの侘しい郷愁をさそった。母の家にいるという、う、そのような現実が、疲れきった頭の中で強い不安と期待とで交錯していた。

会うまでの夢のような期待は半ば裏切られていたが、肉親の「母」に会えたことの仕合せはまだ残っている。

戸惑いばかりで、まだほんとうの母というものをつかめないでいるのだった。

浴槽にじっと沈んで、様々な思いに耽っていると、ガラス戸が突然開いて輪郭のぼやけた白い身体之母が、こちらへやってきた。

母には六歳まで育てられたのだが、共に入浴した記憶はまったく無かった。だが私も人並み

に母親というものと一緒に風呂に入りたいと、どんなにか思っていたことだったろう。いまそれが突然に実現されようとは！

母は身体を手拭で蔽いながら、湯船に近づき「どう？」と言った。そして丸い肩から湯を流して、ためらいもせずに浴槽に入ってきた。母の肌を近くに覚えると、私は反射的に身を交わした。母の肌にふれるのも、母に素肌を見られるのも、厭だった。

老けこんだ顔とは別人のような、母の若々しい肌や、女の生命の充分残っている豊かな乳房が、気にかかるのだった。この乳房で私は育てられたのだろうか。記憶では、小さくて枯れたような乳房が、瘦せた母の胸に小ぢんまりとついていた筈であった。

私は自分の成熟した身体に羞恥を覚えた。小さな子供になって、母の胸に飛び込みたい。三十歳になる女だという意識が、母に甘えさせなかった。成熟した女同士の羞恥感である。少女のような私の平べったい胸では、とても母のそれには、かなわないのだった。

「葉子はおっと太らなくてはだめよ。こうしていると、赤ん坊の頃のこと思い出すわ、お父さんといっしょにあんたを抱いて、いろんな所へ遊びに行ったつけ……。萩原は良い人だったわ……」

母はうっとりと昔の記憶を追って豊かな胸をかき抱いた。さっきの母とは別人のように思え、どちらがほんとうの母かと迷うのだった。

「あの頃はお父さんもあたしも若かったわ、人生のうちでも華^{はな}だったのねえ」

「あなたは泣き虫でうるさかったよ、あんまり可愛い子じゃなかったわ、神経質で気むずかしいところは、お父さんに似たのね、現在^{いま}もやっぱりそんな顔してるじゃないの？ 夫とはうまいってるんでしょうね？」

「ええ」

「いまさら別れるの、なんのつてあたしに相談されたんじゃ困るよ」

母は私の身体に注意深く目を通していろいろで、母の視線がうるさかった。

湯がゆらいで、ざあつと音をたてて流れ出し、母は異様なほど太った身体でゆっくり、湯船から出ると、鏡の前に坐った。長く湯に入っていられない私だが、先に母が出てくれるのを、待っていたのだった。

母は鏡のくもりをぬぐうと、顔を寄せて皺をのばす手つきをした。幸いに鏡は小さくて、一人しか写らなかった。私は傍に小さくここんで坐った。

「背中流してちょうだい」

くったくなく、半ば命令するようにスポンジを渡した。私はやわらかいスポンジに石鹸をつけながら、母の肌当てるのをためらった。これが“母”の背中というものなのだろうか。為体の知れない不思議な感覚を覚えるのだった。

二階の襖を開けた瞬間、派手な蒲団が二つ重なり合うように分厚く敷かれているのが目に入った。枕元ではスタンドがもも色に光り、部屋を間違えたのではないかと、入口に立ったまま、一瞬戸惑った。

母と寝るのだと分ると私は手早く、二つの蒲団を引離した。できれば隅の方まで離してしまいたかった。あまり離しすぎたので、また少し近づけ、そしてまた離した。

「あら、なにしているの？」

いつ来たのか、ネグリジェを着た母が入口に立っていた。私はあわてて蒲団を離れた。

「待ち遠しかった！ さあ早く寝ましょうよ」母は太った身体を、すっぱりと蒲団に入れて顔だけ出した。ナイトクリームで光った顔は、意外にやさしく、私のために用意してあるタオルの寝巻に早く着替えるように促した。

私は持って来た自分の寝巻を、母に気附かれないように急いで着た。蒲団を動かす時に見た寝巻は、洗濯のしてあるものだが、タオルのせいか母のにおいが、深く沁み込んでいて、着るのがためらわれたのだった。

私が蒲団に入ると、母は待ちかねたように手を延ばして、私の掌をきつく握りしめた。不意